



公園での活動は、外の空気を吸う、体を動かす、ハトなどの小動物と接する、などで、すでもう盛りだくさんの楽しみができ、かけっこをしても砂場で穴ほりをして、母親との交流の楽しさに満足して過ごしていたように思う。

二歳前後の頃、体を動かして遊ぶことが楽しくなってきた頃だったと思うが、水のない池のへり（高さ30センチ、幅15センチほどの平均台の上をそりそり歩いていくのと似た感覚）を、ぐるぐると私と手をつないで渡り回ることに凝っていた時期があった。しばらくして、自分だけで渡り歩けるようになったのだが、この渡り歩きは、同年代の子供達にもなかなかの人気で、晴れた日には必ず、同じ遊びをしようとする子供もみられた。祐子は、自分の後ろから自分よりも大きい子供や動作の早い子供が追いついてくると、押されたり、つかれたりすることへの恐怖からか、必ず一回おりて、やりすごしてから、また登り、自分のペースで歩きだすという風であったが、自分の前数メートルに子供の姿があるとはり

きって距離をちぢめ、相手がスピードをあげると、また懸命に追いかけて追いつくことに熱中するようになった。そのうち、祐子に追いかけられ、後からついてこられることを期待する気持ちが湧いてきたその子供は、距離がひらくと速度を緩めて待つようにして追いつかれるのを期待している。祐子は、頬を紅潮させて、追いつくことに夢中になっている。そしてやっと追いついた時、そのお友達は、祐子にむかってにっこりと笑いかけたのである。祐子の嬉しそうな満足そうな顔。次の日から、祐子はこのすばらしい出会いの遊び場で、出会う相手は日ごとに違っているのだが、新しい友達との出会いを求めて、追いかけてごっこを自分からもちかけるようになっていった。体と体を通して友だちのつくり方を、同年代の子供から、教え伝えてもらった、すばらしい一場面だったように思う。ことは交流の全くない時間の流れの中で、二人の子供の心がふれあったということも私には驚異な感動的なことだった。私のことばに訳しなおすなら、「私、初めて友だちのつくり方がわかったよ。」

という祐子の叫びがきこえてきそうである。人のすることをまねてみる、同じことをやってみて相手と心を通わせようという発想が、それまでの私にはあまりなかったこともあって、この幼い子供達は、私にはできないことを発見し、身につけていったようで、何かまぶしいような感じさえしたものでした。

## 二、「それでもTちゃん大好き」

祐子には、地域での出会いとは別に、彼女より一か月あとに生まれたT君という同年の従兄弟との交流がある。大人の都合で、週一度、半日〜一日間、一緒の時間をすごすのだが、これがまた、娘・祐子にとっては得がたい時間なのである。しかし、二歳位までは、大人の橋わたしなしには一緒に遊ぶということもほとんどできなかった。ただ、一方がどこかに這い始めると他方も後をついていくとか、気にいった家具の金具を二人でいじって楽しむ、程度の自然発性的な変流は見られた。あとは、おもちゃの取りあい、貸し借りの問題が多発し、T

君の方は、自分が使いたいものが自分のもの、として行動し、祐子は自分のものは自分の自由に使いたいとして行動するところからくい違いが生じ、そこでのトラブルの調整が多かった。Tちゃんよりも一か月早く生まれた祐子に対しては、Tちゃんに譲ってあげるように説得も多くなってしまったが、そのような経験を経て、祐子は、自分のものと、他人のものをはっきり区別する意識は高くなったようである。好ましい面としては、他の人のものには決してだまってさわったり、使ったりしないという態度、逆の面としては、「他の子に使われるから公園の砂場におもちゃを持っていきたくない」というような保身的な態度とである。

とにもかくにも二歳も後半になってくると、二人の間にことばで交流する場面も少しずつ出てきて、一緒に出かけよう、一緒に遊ぼう、一緒に食べようと誘い合う場面が多くなり、一緒に行動するために、靴をはかせ合うというような予想できなかった事態まで見られるようになった。「Tちゃん、大きくなってきて、やさしくなっ

てよかった」と、祐子は嬉しそうに口にするようになった。電車に乗って出かけたり、レストランで食事をしたり、何か自分にとって楽しい経験をする時、「今度はTちゃんも一緒に連れていきたい」という祐子にもなってきた。種々の葛藤を経て、確実に、他者を受け入れる心が育ちつつあることを頼もしく思う次第である。

### 三、「自分が」「自分で」「自分の」の多発

祐子が、「自分の物」に強くこだわるようになった様子については、前項で少し触れたが、自分の物に対する態度について、従兄弟のTちゃんと祐子の間に興味ある違いが見られるようになってきた。一、二歳代で、祐子の使っているおもちゃでも、自分が欲しければ奪い取って使っていたT君なのだが、二歳も後半にはいって、自分のおやつのお菓子を、家族や居合わせた大人たちに気前よく分けて、自分の分が少なくなってもあまりこだわらないで分けあったことを喜んでいう風である。祐子の方は対照的に、「私の分が少なくならない?」「私

の分がなくなっちゃうからもう分けない」と自分の所有に強いこだわりをみせている。

祐子については、性格的に欲深なのではないかと思える向きもあるのだが、彼女の生活全般を見わたすと、物に対するこだわりだけでなく、自分でやりたい、自分がやりたい、という自我をめぐる欲求の強さも相当強く表現されてきていることに思い当たる。

一歳代から、手づかみでも何でも、自分で食べたい、食べさせてもらいたくない、という面はあったものの、二歳代になってからは自分で歯をみがきたい、自分でボタンをはめたい、自分で着がえたい、自分で排泄のすべをとりしきりたい、など、少しずつ生活習慣を身につけるに従って、おとなの助けを借りるのをいやがるようになってきた。特に、自立を要求するような環境づくりをしている訳でもないのに、子供が自分で成長しようとする力、できるようになりたいと挑戦していく姿は、大変に原始的な、根元的なものなのだろうと思わせられる。

又、祐子は、自分が多少欲ばりな子供であるらしいことを、意識するようにもなってきたており、おやつを食べる前に、愛着の深いぬいぐるみの動物たちを自分のまわりに並べ、自分が食べる前にひと口ずつ食べさせるまねをしてから自分の口に入れ、「祐ちゃんに分けてもらおうと嬉しい?」「祐ちゃんに分けてもらったね」等、話しかけて満足していたりする。精一杯の自我を主張しながらも、他者への愛情の芽ともなるものを、少しずつ自分の中に育てていることを感じさせられる一場面であった。

#### 四、絵本の世界での出会い

祐子と絵本との初めての出会いは生後六か月、ちょうど腰がすわっておすわりができた頃だった。「いないいないバア」の遊びを喜び、自分でも、ハンカチをあげ下げして、この遊びを楽しんでいた頃である。一番初めに用いたのが松谷みよ子著の赤ちゃんの絵本の一冊『いないいないばあ』次に安野光雅の『いないいないばあ』のえ

ほん』だった。親子でやっていた、いないいないの遊びを、さらに視覚的な印象を借りて、身近な動物やら、さらに絵本そのものへの興味を持つところまで世界が広がられたら、と考えた。絵本を使つてのこの遊びも充分に楽しんでから、同じく松谷みよ子赤ちゃんの絵本シリーズ『いいおかお』『みんなねんね』ブルーナの0歳からの絵本シリーズを使つてみた。一歳前後の頃である。保健所の指導では、八か月頃からは絵本も積極的に使つてみましようといわれていた。やはりおすわりのできるようになる頃がめやすと思われる。二歳ごろまでにかけて使つてみて印象に強いものをあげてみたい。

#### ①ブルーナ0歳からの絵本シリーズ8冊

たいへんに視覚的に訴える力が強い。原色の二、三色を使い、一頁にひとつのものが描いてあり、身近な動物や道具がとりあげられている。最大の特徴は文字が全く書いていないことで、使い方はすべて読者に任されている。祐子の場合、興味を持っていった順番は、食べ物、動物、身につけるもの、遊具や家具などで、眠る、

遊ぶなどの行動や生活に関する絵に対する興味は、前述の物に対するのよりもかなり時間的なおくれがあった。やはり、実生活での体験と重なり合って、絵本に対する興味も出てくるのだと思った。

絵につながる最も簡単な歌を選んで歌いながら、絵本を見るのが楽しいという印象づくりを心がけた。例えば『はとぼっぼ』『ぞうさん』などである。それまで子守歌や、あやすための童謡等、どちらかといえは一方的に歌ってやっていたという傾向が強いが、絵本を仲立ちとして、祐子自身もパチパチと手をたたいたり、もぐもぐと口を動かして自分も歌ってみようとし始めたことには感動した。童謡を用いるだけでなく、自分でリズムミカルな詩のようなものをつくって、ことばのリズムを楽しむような使い方もやってみればよかったと思う。

## ② 大友幸子赤ちゃん版「ノンタン」シリーズ

一歳半位から一年間位、ほとんど固執といっているほどの愛着を、祐子はこのシリーズに対して持ち続けた。やはり、ことばの軽快なリズムを楽しむという聴覚的な

快感と、視覚的に訴えてくるはつきりと意味のわかるイラスト的な絵が、初めて絵本に出会う子供を、相乗効果をもって魅きつけていくように思う。が、しだいに、幼児用のノンタンシリーズに興味ひろがってくるにつれて、ストーリーにひきこまれていくように、祐子の楽しみ方も変わってきた。いたずらをして人を困らせたり、意地悪をしたり、約束を破ったり、と祐子にとって日頃、思いきりやれないことを、主人公のノンタンがどんどんやってしまうことを、彼女はどのように受けとめて、毎日くり返しノンタン絵本を楽しんでいたのだろうか。祐子の最も気に入った『もぐもぐもぐ』という本については空んじて楽しむようになり、頁を繰りながら、自分で読んで(?)ぬいぐるみ達に実演してみせるようにもなった。ことばのリズムとくりかえしの使い方がたいへん巧みであると思う。

## ③ 松谷みよ子赤ちゃんシリーズ

祐子とは、『いないいないばあ』『いいおかお』『みんなねんね』の三冊しか使っていない。ブルーナやノンタ

ンとはひと味もふた味も違った魅力のシリーズだと思  
う。

絵は、中間色の割合に地味な色づかいで、ほのほのと  
した雰囲気をかもし出している。使われることばもリズ  
ミカルだが、どちらかといえば、母親が赤ちゃんを抱っ  
こして話しかけたり、あやしたりする雰囲気に近い。日  
常的なリズム感ですすめられているような感じである。

祐子のうけとめ方は、初めからお話の中味を受けとめて  
楽しもうとしていたように思う。『いいおかお』で、ピ  
スケットをもらった動物たちが、「おいしいおいしいは  
どーこ?」と問いかけられる場面で、彼女も自分の頬を  
たたいてみせながら共感を表現していたのがとても印象  
的だった。

④二歳後半にはいつて祐子が好んで読みたがる本にもひ  
とつの傾向がでてきた。かんざわとし子著『はけたよは  
けたよ』松谷みよ子著『小さいモモちゃん』スロボトキ  
ン著『ありがとう、どういたしまして』などがある。自  
分が、実生活の中でうまくできるようになったことを、

お話の主人公達が失敗したりしながらとりくんでいくス  
トーリーを、繰り返し繰り返し、読んでもらいたがるの  
である。自分で、自分の成長のあとを確かめているのだ  
ろうか。

この三年あまりを祐子とともにすごして来て、歌うこ  
と、絵本を読むことは、私共親子にとって最大の楽しみの  
ひとつだったが、その始まりにおいても、この二つの  
ことは、切り離しては考えられない密接なつながりを  
持っているように思えた。それは、視覚的刺激と、聴覚  
的刺激の輻湊的な相乗効果というようなことなのかもしれ  
ない。ひとつの楽しいことを、他の分野にも持ちこん  
で生きる喜びをどんとひろげていくような生活のしか  
たを、これからも祐子とともに、そして来月生まれてく  
るはずのもう一人の子とともに、模索していきたいと  
思っている。